

寿霊『華嚴五教章指事』の中に言及される 『五教章』異本

佐藤 厚

A Variant of “Huayan Wu jiao zhang” referred to in “Huayan Wu jiao zhang zhi shi” by Juryo

SATO Atsushi

“Huayan Wu jiao zhang zhi shi” by Japanese monk Juryo, which is estimated to have been written in the late 8th century, cites five variants of the “Wu jiao zhang” text as “one book”. Comparing these variants with the Japanese and Song texts in the Taisho collection, they can be classified into three categories: (1) same as the Japanese text, (2) same as the Song text, and (3) other. It suggest that the same phrase as the Song texts was circulating at the time of Juryo. At the same time, the Juryo’s “Wu jiao zhang” text can also be classified into three categories: (1) Japanese text, (2) Song text, (3) unique, and (4) other. It suggest that the Juryo’s “Wu jiao zhang” text is not simply a Japanese text, but a mixture of Song and Song texts. This fact may provide a new perspective on the textual theory of the “Wu jiao zhang”.

【要旨】

華嚴学の基本文献である法蔵『五教章』のテキストには、和本、宋本という異なる本が伝わり、その前後関係などが問題となってきた。従来、和本は日本に伝来して以来、ほぼ一定したものと考えられてきたが、実はそうではなかった。

8世紀後半の著作と推定される寿霊『華嚴五教章指事』は、「或本」として『五教章』テキストの異本を5箇所引用する。この異本を大正蔵の和本、宋本と比較すると、1 和本と同じ、2 宋本と同じ、3 その他に分類でき、ここから寿霊当時、宋本と同じ言葉のテキストが流通していたと考えられる。同時に寿霊所用本も、1 和本と同じ、2 宋本と同じ、3 独自、4 その他に分類でき、こ

こから寿霊所用本は単純に和本とは言えず、宋本が入り混じったようなテキストであると考えられる。この事実は『五教章』テキスト論について新しい視点を提供するであろう。

<キーワード> 『華嚴五教章』、テキスト論、寿霊、和本、宋本

1. 問題の所在

華嚴学の基本文献である法蔵（645-712）『華嚴五教章（華嚴一乗教義分齊章）』（以下『五教章』と略称）には古来テキスト論に関する問題がある。大まかに言えば、日本所伝の和本と中国所伝の宋本とがあり、それらは題号、構成、語句の三点が異なる。こうした中、どちらが原本であるかが伝統的に問題となっていた。

現代になり1971年に韓国の金知見が高麗の伝承（鍊本）をもとに宋本原本説を唱えたと（金知見 1971）、1976年に日本の結城令聞（結城 1976）、1977年に吉津宜英（吉津 1977）が、さらに1983年に再び結城令聞（結城 1983）が和本原本説の立場から批判した。その後、この議論は40年進展を見なかったが2023年に筆者が金知見の宋本原本説の前提を批判（佐藤 2023）したことにより、和本が原本、宋本が訂正本ということはほぼ確定したと思われる。続く問題はどの段階で宋本型テキストが出現したかである。

2024年に筆者は、この問題を解明するために澄観（738-839）『演義鈔』の証言に着目した。歴史的に宋本注釈者はテキストの正統性をこれに求めてきたからである。もしこれが事実と認められるならば澄観の段階から宋本型があったことになる。これに対して日本の近代以前の注釈者や現代の学者は、これを批判するために複雑な議論を行った。筆者は、結城令聞、吉津宜英の見解を批判的に検討し、結論として澄観の時代に宋本の構成のものがあってもおかしくはない、という結論を出した（佐藤 2025 刊行予定）。現段階での筆者の見解は、和本は草稿本、宋本は修正本であり、どちらも法蔵が書いたと考えている。

ところで、これまでの研究は『五教章』の構成面、すなわち中下巻の入れ替わりをどのように説明するかを主とした研究であった。これに対して最近筆者は、両本の語句の違いに着目すべきと思うようになり、和宋両本の違う箇所を検討していた。そうした中、8世紀後半の著作と考えられる寿霊『華嚴五教章指事』が、「或本」として『五教章』テキストの異本を5箇所引用しているこ

とがわかった。この異本と寿靈が用いる『五教章』テキストを現在の和本、宋本と比較すると、①寿靈の時代から宋本と同様の言葉を持つテキストが存在したこと。②寿靈が用いる『五教章』が現行の和本とは異なることなど、従来のテキスト論に新たな視点が開かれることがわかった。本稿ではこの内容を説明していく。なお、この問題については結城令聞（1983）が触れているが、整理して論じるまでには至っていない¹。

2. 奈良朝における『五教章』写経

まず奈良時代における『五教章』の写経状況について確認する。〈表1〉は、大日本古文書に記された『五教章』の記録である。

表1 『大日本古文書』に記された『五教章』の記録

* 典拠はすべて『大日本古文書』であり、2/355とあるのは巻2の355頁であることを意味する。

No	年号（西暦）	記載事項	典拠
1	天平十五年自七月廿三日至九月 日 (743)	華嚴教分記 花（嚴脱力）一乗教分記上卷〈用〈黄〉紙七枚〉	24/210
2	(天平十五年月日) (743)	花嚴經疏一乗教分記一部〈三卷「八十八張」〉	24/249
3	天平十五年自八月九日至天平十八年四月九日 (743) (746)	充人成廿九日充花嚴一乗教分記上卷〈用紙十七枚〉受能登忍人人成（標出）甲加宮、華嚴一乗教分記、華嚴經孔目、十面神呪心經義	8/304
4	天平十五年十月十日 (743)	花嚴教分記三卷〈上中下〉 用八十八枚 遠師起信論疏、華嚴孔目、華嚴教分記、成実論議章、	8/338
5	天平十五年自十二月 日至天平十七年五月 日 (743)	又教分記〈上中下〉 二校紙百七十六張	8/378
6	天平十五年自十二月 日至天平十七年五月 日 (743) (745)	枚《已上》〈已用〉 件十枚紙教分記上卷料八月廿四日（白緑抹）〈正用七枚 返十二枚〉以上七枚教分記上卷料*「給十二月」（白緑）	8/389

1 結城令聞 1983年、7 頁。結城の指摘の詳細については本論の後半で触れる。

7	天平十六年正月 日 (744)	〈已上五十枚花嚴教分記中下二卷料〉	8/416
8	天平十六年十二月 二十四日 (744)	同経一乗教分記一部〈三卷〉用紙六十八十一面	8/524
9	天平十六年十月 日 (744)	又一乗教分記三卷 上卷	24/276
10	天平十九年六月七 日 (747)	一乗教分記三卷	9/385
11	天平二十年自七月 九日至勝宝三年十 一月 日 (748) (751)	一乗教分記□卷〈法藏師撰〉	24/509
12	天平二十年五月廿 七日 (748)	五教一卷 伝二卷〈花嚴経者〉	10/278
13	天平勝宝二年七月 一日 (750)	〈廿一正用廿一張筆〉已上一乗教分記中卷料 〈墨三分之一〉	11/300
14	天平勝宝二年七月 一日 (750)	〈廿正用十六返上四〉已上大乘教分記上卷料四 年三月一日〈廿〉七日	11/315
15	天平勝宝二年七月 一日 (750)	大乘教分記	11/316
16	天平勝宝二年十一 月十三日 (750)	五教三卷〈六十七〉・〈已上卅八卷	11/424
17	天平勝宝三年五月 廿五日 (751)	《華嚴一乗教分記一部》《三卷法藏師述》 ・用紙四十九張 華嚴一乗教分記一部〈三卷 法藏師述〉	11/557
18	天平勝宝三年（六 月廿六日類収） (751)	花嚴教分記一部・三卷法藏師述	12/12
19	天平勝宝三年（六 月廿六日類収） (751)	花嚴教分記一部三卷〈法藏師〉	12/17
20	天平勝宝五年（五 月七日類収）(753)	十七紙 花嚴一乗教分記三卷〈恵遠師撰〉	12/522
21	神護景雲元年九月 二十六日 (767)	花嚴経一乗教分記三卷	17/88

22	神護景雲元年九月 二十六日 (767)	經疏廿卷〈法藏師〉華嚴一乘教分記三卷〈惠 遠師〉華嚴七所八	17/92
23	神護景雲二年 (768)	一無教分記三卷	5/693

これを見ると、天平15年（743）から神護景雲2年（768）の間に『五教章』が書写されていることがわかる。これらのうちのどれかが次に見る寿靈『五教章指事』が参照した『五教章』であると考えられる。

3. 寿靈『五教章指事』が言及する異本

寿靈の教学的性格については、すでに金天鶴が整理している²。ここでは寿靈が用いたテキストに着目し、ここでは『五教章』テキストに限定して議論する。

3-1 寿靈所用本と異本の解説

寿靈『華嚴五教章指事』のテキストは、大正蔵本では、底本が徳川時代刊大正大学所蔵本、甲本が建久年間高弁写高山寺蔵本である。以下、異本に言及する5つの例を挙げる。順序は（1）『指事』は、『指事』原文を挙げ、（2）『五教章』は、和本と宋本とを並べて示した。和本は大正蔵本の対校本から復元した。（3）解説は、或本引用についての文脈や和本、宋本との関係などについての解説である。

例1

（1）『指事』上巻指事本（大正蔵 72・210a）

言「二教義者」、者字、或本作「差別」。准上下例其為好也。

（2）『五教章』巻1（大正蔵 45・477b）＊下線は異同箇所（以下同）

○和本

二教義差別。以臨門牛車亦同羊鹿。但有其名。以望一乘俱是教故。

○宋本

二教義差別。以臨門牛車亦同羊鹿。但有其名。以望一乘俱是教故。

2 金天鶴 2015年「第二章 奈良朝華嚴思想の要略」「第四節 寿靈の華嚴思想」pp.32-46

(3) 解説

『五教章』が十門からなる中、第一建立乗の説明が、別教、縁起因分、分相門と進み、分相門がさらに十に分かれる中の第二の教義差別の主題の部分である。『指事』は「二教義者」という原文を引き、この中の者の文字が或本では差別になっており、上下の例からこれが好ましいと述べている。『五教章』は和本、宋本とも「教義差別」である。ここから『指事』所用本は和本、宋本以外のテキストである。

例 2

(1) 『指事』上巻指事本（大正蔵 72・230a）

言「答彼中初列声聞等」者、或本云、「彼列声聞意者、有二種。一寄対顕法故、為示如聾如盲顕法勝也。二文殊出会外、所撰六千比丘等、非是前列衆。此等皆是已在三乗。今廻向一乗故。作如是説也。」有云、此後説難見也。

(2) 『五教章』巻1（大正蔵 45・484a）

○和本

答。彼中初列声聞意者、寄対顕法故。以彼如聾如盲顕法深故也。後六千比丘等者、非此声聞。如海幢比丘等。準之。

○宋本

答。彼中列声聞意者、有二種。一寄対顕法故。為示如聾如盲顕法深勝也。二文殊出会外所撰六千比丘、非是前所引衆。此等皆是已在三乗中。令廻向一乗故。作是説也。

(3) 解説

『五教章』十門の中、第8「施設異相」が十門に分かれる中、第四の衆異として、『華嚴経』と余経との聴衆の違いを述べる箇所である。まず『華嚴経』の聴衆は普賢菩薩などの高位の菩薩たちであるとした後、問答が行われ、それならば『華嚴経』「入法界品」に声聞が登場する理由を問い、二つの答を出す。第一には声聞はいるにはいるが、それは『華嚴経』を見聞することができなかった存在として描き、それにより『華嚴経』のすばらしさを述べるためにというもの。二つ目は文殊菩薩が説法した時に集まった六千人の比丘についてであ

る。和本では彼らは声聞ではなく、海幢比丘のようにすでに菩薩であるという。一方、宋本では、彼らはすでに三乗の中におり一乗に向かう存在である。故に声聞ではない、という。

『指事』は答の文章の中で別本を指示する。『指事』所用本は和本と同じである。或本は宋本とほぼ同じであるが、次の6箇所（下線部）が違う。

○『指事』所引の或本

彼列声聞意者、有二種。一寄對顯法故。為示如聲如盲顯法勝也。二文殊出會外、所撰六千比丘等。非是前列衆。此等皆是已在三乘。今廻向一乘故。作如是說也。

○宋本

彼中列声聞意者、有二種。一寄對顯法故。為示如聲如盲顯法深勝也。二文殊出會外、所撰六千比丘、非是前所引衆。此等皆是已在三乘中。令廻向一乘故。作是說也。

しかし和本との関係において両者は同じ類形である。

ところで『指事』は有人の説を出し、「此後説難見也」と述べている。後説とは宋本の六千比丘の解釈であろうか。

例3

(1) 『指事』中卷指事本（大正蔵 72・233a）

言「論云、自性清淨心、因無明風動、成染心」等者。『起信論』云。「衆生自性清淨心。因無明風動。心与無明俱無形相。不相捨離。而心非動法」等。或本、作經非也。下卷引此二文。云楞伽云又起信論云。由此明知非也。

(2) 『五教章』卷1（大正蔵 45・500b）

○和本

經云。自性清淨心。因無明風動成染心等。以此教理故知。真如不異常之無常故。隨緣隱體。是非有也。

○宋本

論云。自性清淨心。因無明風動成染心等。以此教理故知。真如不異常之無常故。隨緣隱體。是非有也。

(3) 解説

『五教章』十門の中、「義理分齊」（和本は第9、宋本は第10）中、第1の三性同異の中で『大乘起信論』を引用する部分である。『指事』は「論云」とするテキストを引用するが、或本では「論」が「経」となっているという。そして『指事』は「経」とするテキストを批判している。『指事』所用本は大正蔵の宋本と同じであり、或本は和本と同じである。

例4

(1) 『指事』中巻指事本（大正蔵 72・239c）

言「由他無性、以自作故」者、有云、「由他無性、以作自故。」此説不爾。蔵云、「多縁無性、為一所成。是故多即一。由一有体、能摂多由多無性。潜同一故。乃至、一無性、為多所成。多有一空、即多亦爾。」准此、可云「由他性、自所作故」。餘句准之。元、或本作元字。驗疏。处处皆作元字。又或処作无字。

(2) 『五教章』卷1（大正蔵 45・503b）

○和本

何以故。由他無性以自作故。

○宋本

何以故。由他無性以自作故。

(3) 解説

『五教章』十門の中、「義理分齊」中、第3の十玄縁起の中で相即相入の基礎を論じる部分である。「由他無性以自作故」という言葉について有人が「由他無性、以作自故」と述べたことを批判し、法蔵『三宝章』を引用し、「余句准之」で終わる。続いて突然、「元、或本作元字」という言葉が出る。後ろを見ると、どうやら元と无（無）との異同を問題としているようだが、その前とのつながりが見えない。よって、これについてはよくわからない。

例5

(1) 『指事』下巻指事本（大正蔵 72・267a）

言「如宝雲経云」至「不可計数也」者、此中「菩薩」者。或作菩提、

*或本作菩提菩薩。未見本文。今更驗之。

*或本作菩提菩薩 = 菩薩者或作菩<甲>

(2) 『五教章』 卷1 (大正蔵 45・490c)

○和本

如『宝雲經』云。「善男子。菩薩不能思議如来境界、如来境界、不可思量。但為浅近衆生、説三僧祇、修集所得菩提、而実発心以来、不可計數也。」

○宋本

如『宝雲經』云。「善男子。菩薩不能思議如来境界、如来境界、不可思量。但為浅近衆生、説三僧祇、修習所得菩薩、而実発心已来、不可計數。」

(3) 解説

『五教章』十門の中、「所詮差別」(和本は第10、宋本は第9)の第五「修行時分」の中の議論であり、阿僧祇という概念をめぐり『宝雲經』が引用され、その文章が問題となる。『指事』は引用文の中、「菩薩」とある部分が、或本では「菩提」、あるいは「菩提菩薩」となっているという。「未見本文」とは『宝雲經』の文を見ていないということであろう。引用文には「菩薩」が2回登場するが、2回目の「菩薩」は、和本では「菩提」となっている。『指事』の指摘がこの部分を指すとすれば、『指事』所用本は大正蔵の宋本と同じであり、或本は和本と同じといえる。ここに引用される曼陀羅仙訳『宝雲經』(大正蔵 16)は「善男子。菩薩不能思議如来境界。如来境界不可思量。但為浅近衆生。説三阿僧祇修集所得。菩薩而実発心以来不可計數。」(大正蔵 16・235b)とあり、「集」「以」は和本と同じ、「菩薩」は宋本と同じになっている。

ちなみに新羅僧侶で日本で活動した見登が、851年以前に著わしたとされる『一乗成仏妙義』にもこの部分が引用されるが、「集」、「菩薩」の部分は和本と同じであるが、「已」、「數」は宋本と同じである。

○『成仏妙義』所用『五教章』(大正蔵 45・787中)

如『宝雲經』云。「善男子。菩薩不能思議如来境界。(如来境界)不可思量。但為浅近衆生。説三僧祇修集所得菩提。而実発心已来不可計數。」

3-2 整理と分析

3-2-1 整理

例1から例5までを表に整理すると〈表2〉のようになる。

表2

	『五教章』	『指事』所用本	異本	和本、宋本との関係
例1	建立乗	教義者	教義差別	『指事』所用本は和本、宋本と異なり独自。異本は和本、宋本と同じ。
例2	施設異相	彼中所列声聞 ・ ・	彼列声聞意・ ・	『指事』所用本は和本と同じ。異本は宋本とほぼ同じ。
例3	義理分齊	論云	経云	『指事』所用本は宋本と同じ。異本は和本と同じ。
例4	義理分齊	元	元	よくわからない。
例5	所詮差別	菩薩	菩提、菩提菩薩	『指事』所用本は宋本とほぼ同じ。異本は和本と同じ。

以上5例の中、よくわからない例4を除いた4例を整理する。

第一に異本について見る。

- ・ 和本、宋本と同じ。(1例)
- ・ 和本と同じ。(2例)
- ・ 宋本と同じ。(1例)

と整理できる。

ここで注目されるのは宋本と同じ例、すなわち例2で示した施設異相の文である。これは若干の異動はあるが明らかに宋本の言葉である。ここから寿霊の活動した8世紀後半には宋本と同じ語句のテキストが存在したことが確認できる。

第二に、『指事』所用本について見ると、

- ・ 和本、宋本と異なり独自。(1例)
- ・ 和本と同じ。(1例)
- ・ 宋本と同じ。(2例)

と整理できる。

3-2-2 分析

ここから、寿霊『指事』所用本が、単純に現在の和本ではないことがわかる。

いま我々は、日本のテキストは伝来以来、ほぼ同じテキストを使っていると考えているが、実際にはそうではないらしい。ある部分では和本と同じ、ある部分では宋本と同じ、またある部分では独自、というように入り組んだものである。凝然も『五教章』の第一の章名である「建立乗」について『指事』所用本の解釈に言及していることがある。

或本立建立乗、無一之言。寿靈所覽、即依此本。古來流行章本多爾。『指事』解云、「初依海印三昧。建立諸乘差別。乘為本故。是故初有建立乘門」（已上）。意云、此門総明三一等乗、非謂唯局欲明一乗。是故標章言建立乗、不言一乗。或本云、建立一乗。宋朝章本。其言皆爾。具云建立一乗。不言建立乗也。此土古徳鈔云、言「建立一乗」者、有本無一字。然准下釈、有一字勝也。下文雖釈二三乗等、而隨本意故名建立一乗（已上）³

すなわち「或本」では「建立乗」とだけ立てて一という言葉がない。寿靈が見たのがこの本である。古来から流行した本がそうであるという。そして『指事』の解釈を挙げた後、「或本」では「建立一乗」という。これは宋のテキストもそうになっている。日本の古徳の注釈に、建立一乗というのはある本にはない。しかし後半の解釈に準ずれば一があるのがよい、と述べている。

寿靈と凝然との間には約400年の開きがあり、この中で日本伝承のテキストも変化があったと考えられる。すなわち現在、和本の最古と考えられる『五教章』が1284年の禪爾が開版したテキストである。これは大正蔵の和本と同じ形になっているが、これ以前の日本初伝のテキストは、寿靈『指事』所用本のよう、様々な要素があるテキストも存在したのかもしれない。これを探るためには、寿靈と凝然との間に存在した文献を調査する必要がある。

3-2-3 結城令聞の指摘

ところで今回筆者が指摘した問題は、約40年前に結城令聞が指摘していた。結城は「『華嚴五教章』の高麗鍊本・径山写本（宋本）の前却と和本の正当性について」『南都仏教』50の中、「2 日本に於ける『五教章』の異本を考え、本論攷の「もくろみ」について」で、

3 凝然『通路記』巻1（大正蔵72・297bc）

日本に於ける和本『五教章』の異本の問題は、普通には凝然の『通路記』の記事から始まり、又それを資料として論じられるのが一般である。しかし異本の問題に、本格的に取り組むとなると、決してそんな簡単なものでなく、既に『指事記』の時代に遡らねばならない。⁴

として、本論文でも例2として挙げた「施設異相」の注釈を示す。続いて、

この頃から既に異本が発生していたことを知らねばならない。更に驚くべきことは、『指事記』が或本と云った或本の文字が、遙か後代に輸入せられた宋本の文と一致すると云うことである。⁵

と述べて、『指事記』の時代に宋本と同じものがあったことを認めている。ここまで明らかにしたのであれば、ここから和本と宋本の原型の問題に進めばよかったと思われるが、結城はその方向に進まない。その理由を推測すると、それは宋本が早い時代から流行していたことにつながってしまい、結城の主張である和本原本説に抵触する恐れがあったからではないかと考えている。

3-2-4 大正蔵本の和宋の違いの中、寿靈『指事』に反映されていない問題

寿靈『指事』に関してもう一つ考えなければならない問題は、現行の和本、宋本の差との関係である。大正蔵経本の中、和本と宋本との違いは1350にのぼる。それらの多くは則と即の違いという軽微なものや誤写と思われるものである。ただ、中には比較的長文にわたる違いが18箇所ある。今回取り上げた例2の文もこの中に含まれる。それではそれ以外の17箇所についてはどうなっているのだろうか。例えば、次の例は「決訳前後意」（大正蔵 45・483中）の第七である。

4 結城令聞 1983年、7頁

5 同前

和本	宋本
<p>七或有衆生。於此世中、三乘根不定故、堪進同教一乘者、即見自所得三乘之法、皆依一乘無尽教起。是彼方便阿含施設。是故諸有所修。皆廻向一乘。 <u>如華嚴經中同教中說者是。又如上所引三乘与一乘同時說者等。又如法華中廻三入一乘等是也。</u></p>	<p>七或有衆生。於此世中、三乘根不定故、堪進入同教一乘者、即見自所得三乘之法、皆依一乘無尽教起。是彼方便阿含施設。是故諸有所修。皆廻向一乘。 <u>如会三帰一等。又如上所引三乘与一乘同時說者等。</u></p>

下線部が違いであるが、和本の「華嚴經中同教中說者是」と宋本の「会三帰一等」、和本の「等。又如法華中廻三入一乘等是也」と宋本の「等」は大きな違いであると考えられる。しかし、この点について寿靈は言及しない。寿靈が見た或本は和本と同じだったのかどうか。こうした問題は今後の課題としたい。

4. 結語

本稿では、『五教章』のテキストを考察するため、8世紀後半に著わされたと考えられる寿靈『華嚴五教章指事』を検討した。まず判明したことを整理すると次のようになる。

1. 『華嚴五教章指事』には「或本」として『五教章』テキストの異本を5箇所引用していた。
2. これら異本を大正蔵の和本、宋本と比較すると、1 和本と同じ、2 宋本と同じ、3 和本、宋本と同じ、4 よくわからない、に分類できる。ここから寿靈当時、宋本と同じ言葉を持つテキストが流通していたことがわかる。
3. 寿靈所用本も、1 和本と同じ、2 宋本と同じ、3 独自、4 その他に分類できる。ここから、寿靈所用本は単純に和本とは言えず、宋本が入り混じったようなテキストであることが考えられる。

課題として次のことを述べた。

4. 大正蔵に収録される和本と宋本との違いは1350箇所あり、内容にかかわる違いは18箇所ある。寿靈が言及するのはその中の1箇所であり残りは言及されていない。このことをどう考えるべきか。
5. 和本の成立、形成を考えるために、寿靈と凝然との間、すなわち平安期の華嚴文献における『五教章』引用を検討しなければならない。

参考文献

〈略号および一次文献〉

大正蔵＝大正新脩大蔵經

寿靈『華嚴五教章指事』大正蔵 72

法蔵『華嚴一乘教義分齊章』大正蔵 45

二次文献

金天鶴 2015年『平安期華嚴思想の研究：東アジア華嚴思想の視座より』山喜房佛書林

金知見 1971年「寄海東書考－特に五教章和本・宋本の背景について」『学術院論文集』 1

佐藤厚 2023年「『華嚴五教章』の成立をめぐる文献学的問題」『東アジア仏教学術論集』 11、117-137

— 2025年刊行予定「『華嚴五教章』のテキスト論と澄観の問題：」『東洋学研究』 62

高原淳尚 1988年「寿靈「五教章指事」の教学的性格について」『南都佛教』 60、1-21

— 1988年「寿靈における法相文献の引用について」『印度学佛教学研究』 36(2)、644-646

結城令聞 1976年「華嚴五教章に関する日本・高麗両伝承への論評」『印度学仏教学研究』 通号48、9-16

— 1983年「『華嚴五教章』の高麗鍊本・径山写本（宋本）の前却と和本の正当性について」『南都仏教』 50、1-44

吉津宜英 1977年「華嚴五教章の鍊本について」『印度学仏教学研究』 通号51、295-299